

マオヤニ郷土誌（その1）

工藤 浄真

利尻郷土史研究会々長

（〒097-03 北海道利尻郡利尻町仙法志字本町）

1. はじめに

昭和63年度より利尻町内（旧仙法志村）の各集落を取り上げて研究調査し、その結果を報告してきたが、本年度は仙法志字本町（マオヤニ）について報告するものである。

この報告についての内容は既報告の内容と同様に調査の限界または資料不足等の事情により多くの困難があつて充分なものとは言えない。特に、開拓移住の年代は推定推測の域を出ない部分もある。

しかし、本調査地区は他の既報告の集落よりは移住の年代は若干早く、離合集散の傾向も多いと考えられる資料も現存している。

本町は西側に隣接する政治と東に接する元村との間にあって旧仙法志村の中心としての位置を占め、各集落の中では最も大きく、官公庁、商店等で形成された市街地である。この集落の居住者のほとんどはこれまで報告した他の集落とは異なり移動転出入の傾向が強く見られ、当初からの移住定着性が余り見られない。

生活圏は他集落と変わらないが、それは明治の開村前後に強く次第に行政機関の整備にともなつて旧仙法志村の政治経済の中心地となり、一つの村民の生活圏の根拠地として発展した集落である。

集落形成の経緯は地縁、姻戚の関係によって集団化されているが、出身県毎のグループ化や定住性は他の集落に比較して低い。また、生活様式及び労働内容等については他の集落とは若干異なり家屋及びその他の建築物についても同様である。

しかし、戦前の建築物はほとんど無く、戦後に改築され、神社仏閣だけは昔の面影を残している。

2. 地域

(1)地名地形並びに気象

現在の集落名は昭和31年9月に旧杵形町と旧仙法志村との町村合併により正式に仙法志字本町と

なったものである。

明治35年の仙法志村開村以前より昭和7年の地番改正までは、仙法志村字「マオヤニ」と呼称した。以後、昭和20年終戦までは仙法志村字「仙法志」としていた。「マオヤニ」という地名は「ハマナスの花の咲く」所を意味し、家屋や建築物の建設される以前は浜から丘にかけての一带に「ハマナス」の花が咲き誇っていたと古老は語っている。従つて、「仙法志」と呼ぶ集落は現在の元村を指して呼び、「元仙法志」とも呼んでいた。

この集落の範囲は東端は池端氏宅（本町）で浜では旧伊藤の潤より、西端は専称寺（字政治泊66番地）で、浜はその前浜までと山側は各学校、博物館に至り、そして山麓に連なっている。地形並びに気象条件は既報告の集落とほとんど変わらない。ただし、道路については浜側の町道と山側丘陵地の道々が東西に走っている。それを南北に結ぶ学校道路、神社道路、博物館道路の三本があつて、市街地から住宅街に通じている。

また、本町山ノ上の町道があつて、この小集落だけに通じていて政治の東端の浜側の町道に連結している。これは明治時代の自然道が次第に拡幅されて現在に至っている。さらにまた、この道路は中間から広鏡寺前から東側を北に通じ、道々を過ぎ旧火葬場に通じて火葬場道路と呼ばれていたが、本年火葬場が廃止されてこの名はなくなった。この道路とは別に昔からの旧自然林道が昭和57年に正式造林地林道として改良されたものである。

また、この東側に共同墓地があつて、火葬場への道として一部併用されてきたもので、山麓火防線まで続いている林道がある。また、近年東端に道々と町道の連絡道路が完成した。

(2)移住年代とその経路

開拓移住の年代は隣接する政治及び神磯と同年代であるが、移住者数においてはこの集落が他集

落に比して若干多いと考えられる。明治3年にこの地の未開拓であることを知った伊藤米八氏が来住し、鯨建網漁場を開設したのがこの開拓の最初である。伊藤氏は明治以前より鬼脇村アフトロマナイ（現在の旭浜）に入稼ぎ漁業者として青森県北津軽郡小泊村より漁期間のみ滞在鯨漁業に従事していたものである。なお、伊藤氏は明治22年まで入稼漁業者即ち寄留者として漁業経営に当たり定住したのは明治23年からである。明治24年までは定住者が若干あったと考えられる。

明治17年に至って、伊藤氏の他に伊藤常八、伊勢力蔵、駒井万七の諸氏等の各氏が見受けられるが、殆どは鬼脇村からの再移住の出稼漁業者である。しかし、この年代以後に移住定住者は徐々に増加したものと考えてよい。それは、明治23年に伊藤氏が本籍者として定住した。仙法志村市街戸数が約40戸と話されていることから予想される。

最も移住者の増加したのは、明治27、28年から明治35、36年頃と考えられ、以後は大正5、6年である。絶えず鯨漁の好不況により移住移転は繰返されて今日に至っている。移住の経路は本州日本海沿岸からが最も多く、この集落の居住者の殆どは旧鬼脇村からの再移住者である。従って開拓移住者来島年代は旧鬼脇村より約20年遅れている事になる。更に一年間の中の春3月の北前船による来島移住者が最も多い。これを明治29年の本町（マオヤニ）居住者の出身県別の戸数を記すと次のようになっている。青森県9、秋田県8、山形県2、新潟県6、富山県2、石川県5、福井県8、鳥取県7等で他に愛媛、岡山の各県などがあげられる。この年の本町の戸数97戸で人口404人であった。また、明治31年11月から36年4月まで寄留者（後の定住者をも含む）数をあげると次のようになる。青森県25、秋田県26、山形県5、新潟県7、富山県31、石川県31、福井県28、鳥取県なし、愛媛県5、宮城県7、滋賀県7などでこの年代の本町集落への数は204名となっている。

北陸地方出身者の激増が目立ち、更には他集落にはみられない出身県の特徴がある。それは一村の中心市街地の形成された為、商工業、官公庁等の集落としての意味をもっていたことによるものである。

(3)生活の様子

漁業従事者の生活の様子は既報告の通りである。

他にこの集落は旧仙法志村の中心地に位置し、商業、学校、役場、郵便局、社寺等の関係者が多く漁業と関連はあっても生活の様子そのものが全く違っていたことは言うまでもない。また、警察派出所、診療所もあって他集落にはない生活様式を営む居住者が多かった。過疎化された現在もその形態は大きく変化はしていない。

(4)漁港について

この問題についての詳細は第10集で報告済であるが、多くの商業船は本町の澗を利用しあつた舢舨による往来があった。明治の小樽航路の開設以来そして利礼三角航路の開設されて以後の昭和22年まで舢舨、回漕店があつて乗降客、荷物積降し作業が沖がかりで行われてきたのである。

3. 産 業

(1)漁業

この集落内には地形によって大規模漁業即ち鯨建網漁業が伊藤の澗を利用する、伊藤米八、磯八の両氏父子による一者二ヶ統だけであった。それは明治3年以来昭和30年の鯨漁皆無までである。

伊藤米八は明治26年までで以後昭和初年まで同磯八氏が継承したが、大正年代に入って一時一ヶ統を佐孝新蔵が経営に当たったこともあり、昭和年代は佐孝氏が経営した。次いで昭和6年に小樽に本社を置く鯨合同漁業株式会社の発足により、これに参加加入し勇壯な鯨番屋に一部が仙法志合同漁業会社仙法志事業区事務所となり、この漁場の実質経営者は佐孝新蔵氏になり、合同漁業株式会社の解散の昭和23年以後も同氏の経営に当たり終わっている。大正8年に加茂善七氏が東端に鯨定置を行った。なお、漁業免許番号は（利鯨定）四八七、四八八で仙法志では東二三、二四の番号で二〇、二一と番号の変更がその年によって行われた。

また、この伊藤の澗（袋澗）は現存しており、大正7年の豊漁時にマオヤニ在住の石工宮本鶴松氏頭取になって築設したものである。鯨番屋は鯨漁終期の昭和35年に建物を解体除去して仙法志診療所が跡地に新設され、平成2年に更にこの建物を取り除き、利尻町公民館を新築して現在に至っている。

他に、船倉、網倉等は現在本町在住の峨家勝一氏が水産加工場として使用している。漁場の位置

は旧仙法志村字マオヤニ四番地に当たり、現本町青柳橋から東側一帯は伊藤漁場の所有地であった。

戦前に合同会社から漁権を借り受けて、また昭和23年に同会社が解散された後には多くの鯨建網業者が出て本町地区外で経営に乗り出した。

昭和11年前後より、大島虎次郎、駒井島蔵の両氏は政治に、（定置第四九二～三）種田、田中、大森氏の後に大島氏が、（定置四九五）今井～大島の後昭和10年から駒井氏が経営した。その他に神磯に岩下増次郎、石倉良二、安江鉄弥、西田の各氏。戦後になって山田、石倉の両氏がまた、長浜では三浦佐吉氏がおり、戦前後に亘って紺宗治、遠藤万治の御崎や野中で経営に当たり、加藤喜一、茶谷政男の両氏も戦後の一時経営に参画した。

西田松次郎、熊三郎の父子や砂田弥一郎氏戦前後に亘って各方面仕込み親方として活躍した。鱈釣漁業者は余り多くなかったが、沢田末松、武松の両氏に会沢東作氏など操業していた。昆布養殖業者は杉田、沢田、蔦森、山下の各氏等で次第に数は減少してきている。

この集落の漁業従事者は広い意味での何らかの係わりをもっていたことから考えてほとんどの住民がそうであったが、専業漁業者の数は全体の三分の一程度であった。旧水産倉庫の下にある「山谷の澗」、「西田の澗」（旧秦の澗）と西側に続いて「大澗」そして「中島の澗」があり、西端の岩石の浜に続いて山ノ上の漁民の利用している野本の澗などがある。その何れも磯船の出入りする程度の小さい澗である。それらの澗は現在も明治年代から代々の子孫や隣接する漁民が利用している。漁業の内容及び形態の変遷は既報告の集落とほとんど同じである。

大正2年4月2日に発足した水産組合は一般零細漁民にとっては大きな影響はなく、専業漁業者の力が増大する結果になっている。昭和3年には初めて鉄筋コンクリートの水産倉庫が建設されたが、昨年取り壊された。仙法志漁業共同組合唯一の水産物の倉庫であった。

(2) 商工業関係（質屋を含む）

1. 商工業の概要

この集落は旧仙法志村の中心地として社会機構が整備されるに従って商工業者が圧倒的に多く、その職務も多岐に亘っている。明治29年当時、既に雑貨商3、小売業5、石工2、仲買業5、大工

3、理髪業1、湯屋業1、料理飯食業2の各業種記されている。未だ旅館は記されていない。

それが、大正末期になると内容的に大きく変貌している。商業9、呉服商6、金物商1、荒物商4、薬種業1、回漕業2、代書業2、宿業4、湯屋業1、豆腐屋4、大工4、石工3、理髪業2、料理屋2、馬車屋6などとなっている。これは旧仙法志村全体の数字であって当集落に存在した数字は確定できないが大半の業者がこの地域に集中していたものと考えられる。

2. 商業経済組合

1) 更には明治41年2月当村池田斌太郎氏の提唱による産業組合が設立されて共同購買、販売、貯蓄を目的とし、購買店舗を設置して実動しその成果を納めた。名称は「仙法志信用販売組合」とし、会員269名で出資口数607口で商的広範な活動をし、終戦時までの継続であった。店舗は現原崎水産加工場がその跡である。原崎勇次氏直接担当していたのは後半のことである。その内容としては購買部として取り扱った品物に白米、茶、醤油、味噌、缶詰類、足袋、ウスベリ、縄筵の生活用品であった。信用部としては貯金4種類とし、資金の貸付を行い、有担保無担保とし有価証券、土地、建物を認め全額は評定委員会によって作成した。販売部は生産品販売をした取引商人との履行が障害となり良い結果は得られなかった。

鯨不漁による生活困難なる漁民救済を目的としたが地元商人との折り合いに苦労を重ねてその葛藤があり悪戦苦闘の運営であったようである。昭和18年2月に解散した。

2) 公益質屋

未曾有の大不漁不況に陥った村経済による村民の生活を守るために仙法志村は公益質屋の設置に踏み切った。昭和5年11月10日より業務所を役場内に置き、同6年3月25日より店舗は字マオヤニ363番地の鬼脇安江商店仙法志支店の閉鎖した店舗をこれに当てた。この建物の規模は石造亜鉛引鉄板葺倉一棟10坪、同二階10坪の既設倉庫を利用した。そして、事務室及び附属建物として一棟21坪を敷地買収費を含めて三千九百六円、その他設備費を合わせて四百九十四円で新築して業務を開始した。貸付制限金額は消費資金（生活資金）は20円、生業資金（事業資金）は50円を一口とし、一世帯当たり各々100円、200円とした。貸付利息月

二分二厘五毛で流質期限は契約当日より満四ヶ月し、弁処方等条件を設けた。事務長は村長が当たり、会計、事務員三名とし従業員に山田繁吉、越後谷源蔵両氏の二名を配置した。

昭和8年10月の人口は2,927人で内訳は漁業者2,577人、小商工業者177人、俸給生活者117人が主なもので、この年の貸付件数301件で質物点数461点の取扱内容になっている。これは昭和14年度までの経営内容の資料がなく、以後の状況は不明である。村政資料によると昭和27年3月5日に再認可を得て再出発している。生活資金一口一千元、生業資金一口五千元、一世帯5千元、一万円とし、29年度の運転資金は506,597円となっている。また、昭和30年度の記録には借入50万円の償還終了年度が昭和31年度になり、名実ともにこの年度を以て閉鎖となっている。

現在この建物は本町住民の家屋となって残っており、石造倉庫は消防車庫兼住宅の建設時の昭和41年に取り除かれた。場所は現消防分遣所の車庫である。

3) 仙良会

昭和初期に結成されたと考えられる。仙良会は中島伍三氏が木谷常次郎氏らと相談し仕込み親方に対抗して昆布の良質化を図り価格の適性化と日用雑貨品の安値販売を目的として提唱した商業経済組織があった。友田重吉らもいた。マオヤニの漁業者の大半が会員となり、競って良質の昆布を製品化し一人当たり20打から30打出荷したといわれている。この会専任検査員は面野仁吉氏で製品を厳しく吟味して検査したという。そして出荷し昆布から一定の出資金を出し合い、日用品、雑貨品を扱う小売店を出したといわれている。店舗の場所は現在の原崎商店である。その他、詳細な内容については資料がなく不明である。終戦時まで継続されていた。

4) 海産商仲買人

水産物仲買商人はこの集落に集中的に多く数えられる。仲買商だけでなく日用品雑貨の販売から金融面で貸付の便を計っていた商人が多い。概略一商人当たり、50～60人から70～80人の顧客を持ち経営していたようである。明治の中期には秦豊一、安達市三郎、西田松次郎、坂口喜代松、小林藤吉、日比謙二、木保勘次郎の各氏らで外の海産雑貨商人もこれに類似した商行為の人は多かった

という。

仙法志商業の先駆者である商人は伊藤磯八、道間末吉、坂口喜代松、北野源吉の各氏で、続いては中川原増次郎、安江鉄弥の各呉服商人にもまた同様のようであった。後期には新たに上田石松、西尾正、長谷川荘松、木村幸一郎、能登亀吉の各氏開業した。大正から昭和には二代目の西田熊三郎、上田政太郎、日比正一の各氏へと続いている新しくは野呂田良助、加藤喜一、山田善吉、そして元村からの井田鹿之助へと時代は変わっていった。戦後まで続いたこの商人は西田、上田、井田能登、日比の各商人であったが、戦後の民主化による漁業協同組合の棧溝改革による影響に営業困難となり、流通も変わり自然廃業した。

2. 各商店の概況

1) 各時代の状況

開村前からの明治32年に中川原、その後の鬼脇安江の各呉服店が開業した。明治29年には海産及び雑貨商の筑山健太郎、佐藤寅三郎、西田松次郎の各氏商店、小売商の三上、大町、長谷川、本間桜井の各氏の商店、料理店の小野、須藤の各氏、理髪業の加藤氏、湯屋業の栗田氏、回船解部の佐孝伍作氏、宿業の佐孝栄松氏等があった。

明治から大正には新規に松野、武田、山脇、田居、越後谷の各呉服店が開業した。また昭和に入って遠藤氏開店したが、武田を除く各店は姿を消し遠藤氏は一昨年店を閉じた。

荒物海産雑貨商には上田、西尾、木村、日比、能登の各氏の新規開店があった。金物商には加藤中の両氏、それに各小売商店に信用購買組合、小野、島中、秋山、大島、安江の各氏、文房具商の川口氏である。

昭和年代には干場、紺、宮本、坂元、加藤の各氏の雑貨小売商店に仙良会等の開店である。以上の中で現在も続けて営業している店は中川原、武田、安宅、木村各氏の商店だけである。

2) 旅館

佐孝栄松氏は漁業の傍ら旅人宿を開業したのは明治29年以前のことである。過疎のために昭和40年代に終わった。現在の消防分遣所の所が佐孝旅館で約80年間の歴史であった。長谷川旅館は長谷川荘松氏が昭和初期の不況により建物を改築して開業したもので歴史は前者程古くない。商店からの変身で現在も営業は続けている。その他に昭和

の初め学校道路中間東側に蔵宿所が昭和初期にあった。漁組の長屋で旅から漁民をとめた。

3) 菓子店

明治35年以前に中松菊次郎氏は漁業兼菓子店を出した。氏は明治20年代に来島したが他のことは不明である。大正時代に入ってから中村貞太郎氏は現在の神社道路の駒井氏宅付近で菓子業を始めたもので大正5年の大火後に今の野本商店宅に建物を移転して開店した。以後昭和初期まで営業したが不況で転出した。親は明治20年代に来住していたと考えられ、前者中松氏と同年代の来島のようなのである。昭和に入って山下徳次郎氏の松月堂、木本慶一氏と山田清隆氏の菓子店が開業している。山下氏は神磯の人で現在の宮道義之氏の所であった。終戦まで開店していたが戦時中に死去し閉店となった。木本氏は杓形から来住で戦時中に一時中断があった。戦後には再開したが店主病弱となり、昭和45年頃に店を閉じた。市街地中央である。山田氏は鬼脇からの来村で昭和18年まで市街東側に営業していたが、この年再び鬼脇に転出した。従って現在は市街地に菓子専門店は皆無になった。

4) 飲食及び料理店

明治20年代に小野梅之助、須藤弥七の両氏は鬼脇村から来住して料理店を開業した。明治35年には新しく金丸金太郎氏の名が見られる。須藤氏は本町山ノ上に、小野、金丸の両氏は少し位置は違うが市街中央のようであった。金丸の後は佐孝栄松氏が「秋田家」と命名し、代が変わって佐孝新蔵氏に経営されて戦後鯨漁皆無まで続き、盛況を極めた。須藤氏は大正初期に終わっているようである。「中島屋」は中島伍三氏が大正の初め夫婦合意の上料理店を開業したものである。中島家三代目嘉春氏の代まで続くが「秋田家」同様に昭和30年代に実質的に廃業した。鯨不振とそれによる過疎には勝てなかったのである。盛況時には千客万来で常時酌婦が4、5人はいた。また、大正時代以後にも小料理屋、飲食店、またはこれらに類似した店は数多くあったといわれている。

波江、友田、三嶋、春日、木村、宮本、田中の各氏らの店がそうであったという。中でも青柳橋から東部の集落が賑やかであったといわれている

昭和の初期不況時には小規模店は殆ど姿を消した。昭和10年当時には橋の袂の浜側に「ひさご」という喫茶店があったが長くは続かなかつた。さ

らに、戦後には井田氏の開店したカフェー「日の出」もあったが数年間でまもなく店を締めた。

その後になって飲食店関係は雨後竹ノ子のように顔を出した。昭和25年頃になってから宮本氏の西側の空川の上に「裕ちゃん」、学校道路の八木宅の所では「萬龍」が、嶋野宅の浜側には「現代」などが開店した。何れも漁不振で閉店になった。現在ただ一軒のみ井田食堂は昭和30年の開店である。また、岡山商店は昭和50年頃二階に喫茶店を開きまもなく店を閉じ、近年博物館隣に観光シーズンだけの「ピットイン」を開店した。

理髪店関係

開村以前は加藤岩蔵氏、その後西嶋太蔵氏である。

大正時代に入って、西嶋氏の弟子の駒井倉次郎氏は現郵便局の隣に開業し、昭和に入ってその子正克氏が継承した。同氏は昭和30年代に杓形に移転開業し、その店舗で佐孝勝三氏が営業した。同氏は昭和50年頃小樽に転出して店舗は空家になった一方、三浦佐吉氏は小樽で修業を積み、昭和の初めに青柳橋付近で開業したが昭和10年漁業合同会社に入って廃業した。その後、昭和15年宝達辰男氏は浴場の一角を借用して開業し、場所は変わったが現在に至っている。坂元留蔵氏も一時期営業したという。「萬龍」閉店後に八木タカ氏は店舗を改造して、「タカ美容院」を開いた。廃止後の昭和55年頃に岡山商店前の元川口商店後地に、七尾氏は美容院「レディー」を開店した。

湯屋業

湯屋業は明治29年以前既に栗田慶吉氏が久保田倉吉氏を雇人として開業していた。以後西嶋太蔵氏明治36年に開業していた。そして、宮本鶴松、山本イト、杓形に移転した浜本の各氏がこの業に携っている。次いで上ノ尻からきた蝦名竹蔵氏が、大正12年以前に経営し、昭和10年頃杓形に移転した。その後、原崎勇次氏権利の元で宝達伊佐男氏杓形よりきて従事したと考えられる。それは戦後まで続いたが廃止され、昭和30年頃より川村周八氏が現武田商店の東側に建物を新築し開業した。五、六年で終わった。各家庭に風呂が普及し、利用者減により続けられなかった理由によるものであった。

現在の歯科診療所の場所は何十年間も続けられ、多くの住民の交流の場であった浴場の跡地となつ

かしいが今はその面影はない。

鉄工業関係

古い昔より鉄工業関係業者は当然開業していたと考えられるが資料がなく不明である。

乏しい資料の中からは最も古い業者であろうと考えられる業者は小練喜三松、清佐太吉の両氏である。両氏の名は大正七年の記録と明治後半の村勢要覧（古新聞記事）に数字でこの数があるという理由である。

小練鉄工場の場所は現在の小練家より少し浜側から、戦争前から昭和63年まで岡山商店東側の小広場にあったが再び昔の場所に戻っている。平成二年に小練一氏の死去により鉄工場は本町から姿を消した。

それから鉄板業屋根屋として大正年代の終わりから昭和の初めにかけて、何名かが開業していたようである。戦後一時に好況を見込み新開業し、或いはこれを期待した業者は専業として成立せず、昭和30年代で廃業に追い込まれる結果となった。次に揚げる川村、清佐の両氏は遂に馴れた土地を去り、新しい試練に立たされた。

戦後に現在の理髪店の所に川村周三氏は川村鉄工場を新設したが漁の不況の影響で数年で工場を閉じた。漁船を対象としたものであった。板金店には現土田商店の前に昔から清佐福一氏の家屋兼作業場があった。父太吉氏は大正の中期からの人である。

次に、その隣に戦後に星田島太郎氏は屋根鉄板葺業を開業したが昭和40年代前半に廃業した。更に、戦後に山脇呉服店の後に出所増三氏は食料品店を出店し、後に鉄板店兼金物店として営業している。川村氏は政治に移動したが間もなく札幌に、清佐氏は死去により家族は昭和40年頃札幌に各々転出した。

小練鉄工場の前の建物は、鈴木なみ氏が薬店兼文具店を営み、その後干場氏がここで商いを営んだ建物である

3. 交通運輸

1) 海上輸送

交通並みに運送については離島という特殊事情から海上における貨客の取扱いが漁業の開拓とその移住生活の増加のより次第に整備されていった。

陸上における、この機関は昭和の時代に入ってようやく整備の機運が見えはじめた。しかし、海

上陸上の両者ともこれらの組織並に機構、機関は今時点からみると戦後になってはじめて今日への動きが始まったものである。海上の交通運輸は小樽藤山汽船と小樽日本郵船後に北海商船に所属する回漕店、解部の二者が既に旧仙法志村開村以前に設置或いは組織されていたのである。

2) 高山回漕店

藤山汽船に属したのは高山回漕店である。明治36年5月1日、砂田弥一郎氏は地域有志と協議の上組合回漕店を創設したが不調に終わったが再建し2年後には鬼脇の多田堅次郎回漕店を買収したとある。それは既にこの支店が仙法志におかれていたのである。従って考えられるのは組合回漕店とこの支店とを吸収して一社にして強力化したと推測される。

更にこの時代以前に元村金子ノ潤に回漕店があって、渡辺虎男氏そして寺下氏がこれを継ぎ、砂田弥一郎氏三代目で実際の経営管理は4、5年であったといわれている。そして砂田氏は建網漁場経営に本格的に乗り出したのが坂江清太郎氏回漕店に移行していくことになったと考えられ、大正9年のことである。

当時、藤山回漕店といわれていたが、高山回漕店の名称は坂江清太郎氏命名である。汽船の寄港する場合はダイサン屋号の旗が上げられたものでこれによって小樽から船の来ることを周知したといっている。そして、戦後の昭和23年には利礼三角航路の駅舎が政治に建設されて、そこに移り昭和40年代まで貨客の取扱い、荷役作業がおこなわれた。戦前の昭和10年頃には北見回漕店を合併して、これまでの二店が一店に統合された。

3) 北見回漕店

この回漕店は藤山回漕店に若干遅れて開業したと考えられるが、詳細不明である。明治35年既に金丸金太郎氏は回船解部を開業している。その所属する汽船会社は不明であるが、前者の回漕店ではないと考えられる。この回漕店名は大正初期になって明らかになり、日本郵船から北海商船の所属であったようである。

本町中心部に大正初期には井城常太郎氏宅が、この店舗とし営業し本町西部の新谷新一郎氏宅があって、北見回漕店を経営していた。後、大正後半になって新谷氏は原因は不明であるが、経営に失敗したといわれ、これを継承した経営者は大島

虎次郎氏であった。その後、約20年間の昭和10年代半ばに同回漕店は高山回漕店に統合合併まで続行され、艇部もまた統合されるに至っている。使用した洞は本町と元村の境界線に当たる屏風岩に接した「屏風岩の洞」で中規模の船入洞である。

4) 回漕艇部

回漕店と一体であったのは艇部である。明治35年既に二つの艇部があり、佐孝伍作氏のカネサ艇部と金丸金太郎氏のカネマル艇部である。佐孝氏は明治20年に渡島し定住し、漁業の傍ら数年後に艇部回船業を開業した。この艇部は藤山汽船系の回漕店、即ち砂田弥一郎氏の組合回漕店から藤山回漕店、そして高山回漕店に属した。そして艇部はその子友七氏、孫友一氏と三代に亘ったが航路の一島体制に入った昭和40年代中間に自然解散になった。使用した洞は伊藤の洞（秋田屋の洞）を伊藤磯八と契約し終戦後の昭和22年まで使用した。艇部方はほとんどマオヤニ元村の人々で番屋は現在の佐孝友一氏宅で場所は変わっていない。

大正5年1月8日のマオヤニ大火で番屋は焼失した後、一時青柳橋の袂にいた。そして月日が経て昭和8年に佐孝友七氏は沼浦（オダトマリ）のカクシチ、加藤佐市氏の番屋を買収し、カネサ艇部の建物を一新して発展を記念して撮った写真が残されている。佐孝友七親方、船頭田端栄太郎（元村）、寺下仁、杉田源太郎、杉田松昌太郎、佐孝友義、赤坂勝太郎、上木善吉、津田又四郎（以上元村）、駒井島蔵、小中栄太郎、田端金蔵、八幡外蔵、松枝薫、五ノ治雅太郎、五ノ治要作、亀谷猶蔵、上木太市、上木市松、成田利三郎、池端重二、伊藤惣吉、木村忠一、島山敬治（以上マオヤニ）、宮下要一、宮下国次郎（以上政治）、回漕店員上木武の各氏等で元村の人々の多いことも注目される。

また、大正年代の一時あった中島艇部は佐孝艇部の下請していた中島伍三氏である。更に、金丸金太郎氏の艇部は明治35年以前の開業で、継承したのは新谷新一郎氏の経営した北見回漕店の北見艇部となっている。金丸氏と新谷氏の間にはマルエイ艇部があったのである。従って金丸、佐孝、新谷と続いて大島虎次郎氏の権利となり、昭和10年半ば合併された。ここの艇部方には元村山ノ上の人々が多く、船頭には米脇藤五郎。そして田古馬吉、玉谷文吉、飴田亥三吉、中川泰蔵、五十嵐

の各氏に帳場に植木喜吾氏がいたという。乗客の数よりも貨物の取扱いの方が多かったといわれている。

仙法志は立地条件が悪く冬期間は時化が多い。そのために船は鬼脇から仙法志へはなかなか寄港してくれなかったという。それで船が稚内出港を確認して、鬼脇まで雪道徒歩で艇部の人々が仙法志はそんな大時化でないから是非「船を回してくれ」と船長に依頼しに出向いたという。船を回して貰いたい一心で頼むのだが、実際には大時化でとんでもないえらい目にあったり、途中で近くまで来て戻ったこともあったという。

5) 陸上運送

水産物の運送運搬には明治大正昭和の前半に馬車屋が大活躍をした。当地で競馬大会を開催する程の馬で交通にも欠かせない機関であった。

各棟建網漁場には必ず一頭の馬がおり、各水産物商及び仲買商に専属の馬車屋がおり、馬なしでは商売はできなかった。利尻島内旧各村中最も多かったのは仙法志村であった。最多数を数えたのは大正時代で30頭から40頭近くであった。商取引上、鬼脇経済圏にあり、汽船の寄港回数の少なかつたことも一因している。マオヤニには特に馬車屋が多く、年間通じて馬なしで考えられない状況にあった。武藤米吉、常吉、常次郎氏の兄弟高橋道太郎、道司、道三の兄弟、中村亀吉、豊三郎氏の兄弟、長谷川猶松、佐孝文次郎、菅野惣二郎、諸沢栄次郎の各氏らに成田男次、岩井岩松、本間秀吉氏等がいた。戦後になって車社会に変わった今日、一頭の馬も見られなくなった。

年代は昭和10年になって馬車屋馬車屋組合を結成し、運賃の協定や親睦や亡くなった馬の供養祭などを取り決めた。また、島内では最大級の馬車であった。仙法志鬼脇間の馬車賃は20銭であったという。大正5年にはその数54頭であった。

また、人力車が島内唯一の開業してお客さんの便宜を図ったといわれ、大正5年、小練総太郎氏が車夫をしていたという。宗谷管内ニヶ所である冬期間は馬糞で、その馬の足跡が雪道をつくる唯一のものであり、犬糞も使われた。しかし、馬車の全部が馬糞になったわけではなく、6頭から8頭程であった。この時代にはそろそろ自転車が入り出し、大正5年には7台で駕泊の22台に比べると3分の1であった。海の風には仙法志、鬼脇。

仙法志、杓形間一般漁船による貨客の往来が行われていた。

4. 水産加工

古くは水産加工といっても現在考えられるような水産物の加工ではなく、二次産品であって、一次産品の簡単な製造であった。その製品は身欠鯨、鯨鱈、棒鱈、開鱈、煮海參、塩鯨、酢蛸、長切昆布、天草等であり、肥料として鯨粕、鱈粕、鯨粕、雑粕、笹目、鯨白子、鯨粕、胴鯨などで他に鯨油その魚油であった。これらの製品はほとんどがマオヤニの仲買人、海産物商人によって買い占められ、小樽、大阪、伏木、敦賀等に出荷され、昆布は主に大阪に売り出された。

それらの製品は一部の鯨建網業者と少しの刺網業者の手によって行われたものである。水産加工業といわれる産業及びその業者は、第二次大戦頃からその兆しを見、そして戦後になって本格的な水産加工業が始動したものである。しかし、これもまた漁業の不振により特に他町村に比較して当地集落では停滞して業者のほとんどが廃業に追い込まれてしまった。戦前より水産物の加工の先駆者は原崎勇次氏であった。氏は産業組合（信用購買組合）の廃止の昭和18年以後に、大島虎次郎氏と共同で塩蔵鯨の製造を開始し、更に16年よりトロロ昆布の加工に大島氏倉庫に数台の機械の音を響かせた。これは昭和25年まで続行し、さらに22年より鯨燻製に乗り出し、鮭、コナゴの燻製まで業域を拡大した。続いては昭和30年代に入って鯨漁が皆無なってスケソ寒干の水産物加工を経営に当たった。原料不足に一時中断したが、昭和60年前後より再び鮭の燻製を始めた。さらには、スケソの紅子の製造も始めたが昭和62、3年で諸条件の悪化によって終了している。

現在は他のウニ加工業者に加工場を貸しているのである。（昭和30年代後半に水産加工業の原料不足とその高騰によって、不振時には「竹ノ子」の製造品販売に共同により16年間続けられた。この加工業にはほとんどの水産加工業者が参加した）。

戦後には多くの業者が我こそはという意気込みで顔を出してきた。戦前村長であった三ヶ尻喜代吉は戦後の公職追放で起死回生を図り、鯨塩蔵業を始めたが失敗に終わった。武士の商法であったようだ。伊藤芳生氏は昭和30年から「ウニ」の折

り詰め、（竹ノ子）その他などの事業を始めたが昭和54年病死して終わり、井田鹿之助氏はトロロ昆布加工などをし、食料品の傍ら事業を大幅に転換したのが戦後の昭和30年までであった。

その後、元村の川村周八氏も元村及び本町でスケソの製造、茶谷末雄、高橋道司氏も一時的に行ったことがある。戦前後を通じて諸沢、茶谷明夫の両氏のような小規模な業者は数多かった。戦後より現在も継続され発展した業者は峨家勝一氏である。氏は戦後初めて水産加工業者となるが、昆布仲買商からスケソの肝油製造業を開始し、その後には鮑、ナマコの乾物製造、そして鮭の燻製、鮭、スケソ及びタラコの製造生産から仲買から出荷までの一貫した海産物商人として実績をあげている。さらに、「ウニの折詰」の委託業者になっている。昔の伊藤漁場の建物が加工場である。昆布のトロロ加工事業を10数年前より開始し、建物も増改築して年間操業を続けている。

5. その他の商店

島野商店は明治から続いた豆腐屋であったが、戦後に食料品店として再開された。しかし、3年前に過疎化により廃店になった。また、大正時代には古府、面野、戦前戦時中に杉田の豆腐店があった。昭和初期に開店した紺、大正時代の大島の各商店は戦前後の商品不足と鯨漁業に乗り出して商店を閉じた。現在の各氏宅の店舗があった。

日比商店も明治時代からで終戦後まで続いた。現在の藤井幸男氏宅の所であった。昔は水産物仲買人だったが昭和初期の大不況に殖無無尽や各種保険の代理店でもあった。また、サンマや鯨の燻製事業も行った。昭和26年には信金仙法志出張所の店舗に貸したことがあったが、謙二氏二代目正一氏の死去により閉店となった。昭和30年頃である。

仙良会経営の店舗は木谷常太郎宅で戦後木谷商店として開店営業していたが、昭和33年で店を閉じた。現在の原崎商店は木谷商店の後に以前から開業していたのがここに移転した。山脇商店は明治後半から戦後まで続いていた。呉服物、小間物商であったが、戦後同氏の死去により出っ所増三氏これを継承した。商品は食料品店と変わり、続いて現在の金物兼板金業となって現在に至っている。旧郵便局前にあった信用組合店は原崎勇次氏が住んでいたが、戦後に石倉良二氏転出後、ここ

に移住し、水産加工場として現在も使用されている。

海産商でもあった能登商店は米穀雑貨、煙草等専売品の荒物商であった。明治後半より戦後まで続いたが亀吉氏死去し、子の龍太郎氏復員して後昭和20年代後半に大阪に転出した。その後、中島千秋氏が入居した。駒井薬店は現在の家屋にあるが、店舗兼用であった。昭和元年の開業は現在地より少し離れた、現在の井田食堂の一角で開業したものである。戦後まもなく営業を止めている。当時の建物として残っているのは駒井重蔵宅だけである。加藤商店は以前から米穀並荒物商店であった。これが現在の野本商店である。明治30年代後半に加藤兼太郎氏来島して以後に同氏は金物商店を開いた。その養子米太郎氏は家督相続してそれを受け継いだ。また、子金貞氏がおり、呉服物商店を開店させ、分家独立して兼太郎氏同居した。金貞氏は昭和53年に転出して親戚関係にある野本昭二氏がこの商店をそのまま継承した。

本家に当たる加藤金物店は戦時中より鉄郎氏が後を継ぎ、新聞をも取り扱った。一時、弟の悦郎氏は呉服物を同店舗で商いしたこともある。しかし、この商店は昭和50年に店を閉じ、札幌に転出して建物は残っていない。現岡山商店の西側に当たる位置がその土地であった。川口商店は文具商で雑誌類を扱っていた。川口秀雄氏の弟金市氏と続き、同氏死去して正敏氏の代になってまもなく転出し、中島勇氏入居開店したが、昭和40年店を閉じた。宮本洋品店は宮本鶴松氏の店であるが、石工でもあり、風呂屋、そば屋であったが再三家屋も貸したとされている。現在の田中卓治氏も入居したこともあり、焼失後に田中氏が建てたが道路拡幅工事によって再び新築された。宮本氏の子、正則氏も各職業を経験し、その子の稔氏は郵便局に勤務していたが電話の自動化によって昭和51年に札幌に転出した。

昭和初期に開店していた商店は島野豆腐店、星田商店、マルイチ中村菓子店、マルヤマ山下松月堂、(菓子店)カクキ木本商店(菓子商)、山田菓子店、マルナカイチ中金物店、マルキチ加藤金物店、ヤマシヨウ西尾商店(海産雑貨商、西尾喜太郎)、仙法志信用購買販売組合、仙良会、ヤマジョウ深尾稔商店(酒、雑貨)、㊦駒井薬店(食紅、半紙)、ヤマセン干場商店(米穀、雑貨)、

カクメシ紺商店、(食品、酒)ダイマル大島商店(酒、雑貨)、マルカ能登商店(米穀、雑貨)、ヤマイチ山脇商店(呉服物)、ヤマニ安宅商店(食品)、野呂田商店、(果物)マルセイ川口商店(紙類)、ヤマタニ茶谷末吉、(木炭)、マルナカ中川原商店、(呉服物)カクチョウ長谷川商店、(雑貨)坂元商店、(芋)ヤマシ上田商店、(醤油、雑貨)、小練鍛冶屋、津田鉄板店などの名が記されている(当時の〇〇家の買物帖より抜粋)。

安宅商店は元村山ノ上に居住していた安宅善七氏の開店である。昭和の初めのことである。木村商店は木村幸一郎氏の開業した、海産仲買商が最初であった。同氏は明治20年代に来住し開業した老舗である。昭和に入って病死後に子供兄弟の応召、戦死などがあって一時中断したことがある。現在は米穀、文具店となっている。

現在の田中由秋氏宅は戦前後の自転車店である大正時代はこの場所が「ミヨシヤ」といわれたソバ屋だったという。

6. その他戦後の新規開店

土田時計店は宮本氏宅に一時間借りしたが、清佐氏札幌に転出後地に店舗を新築し開店した。道路拡幅工事等により昨年度の新築をした。昭和32年に鬼脇から来住した。池端商店は重一氏新たに昭和29年食品店を開業し現在に至っている。岡山商店は勇氏が政治から転入し、昭和36年に前坂元商店後地に新築開店した。食料品全般の店である。さらに井田鹿之助氏はパチンコ等娯楽店にも扱ったがまもなく店を閉じた。氏は昭和11年に元村から転入し、海産商人に徹した人で他諸業種はその傍らであった。菅原薬店は鬼脇の仙法志支店として昭和30年に一時借店舗で営業し、昭和35年に現在に移り営業中である。

藤井文博氏は昭和22年、吉田利男宅に入居し、洋服仕立業の傍ら、薬品食品の店であったが2年前に廃業した。元村から本町に上木善吉氏は豆腐屋を昭和35年開業したが、昭和60年に閉業転出した。戦後の上木氏の前に宝達伊佐男氏は数年間営業したことがある。

神磯の藤井幸作氏は水産倉庫前2、3年間肉の販売した。昭和40年代後半のことである。

7. 大工関係

明治大正の時には相当数いたようだが漁業との兼業で判然としない。名は田中由太郎、葎屋の伊

藤惣七、石工の友重重蔵の各氏で他に村上桑吉、
 折田与吉の各氏があげられる。大正時代になって
 成田愛之助、小林末吉、佐藤清治、三村孝二郎、
 徳次郎兄弟、金子民平の各氏の名が出てくる。

昭和に入ってから10年頃吉田工作所が青柳橋
 の袂にあった。これは写真屋でもあった吉田利男
 氏の家具の細工場であったという。戦後になって
 からは本町に佐藤、吉田両氏、他に樺太から転入
 の松田小枝治である。

船大工としては松田同様の坂井福松、福蔵親子
 の造船所があって、戦後多くの漁船を作ったが、
 漁不振で昭和30年後には余り振わなかった。野本
 昭二氏は磯船を現在も作っている。最近の漁業衰
 退後には建築会社に属する大工が多くなってきて
 いる。戦前後には作って売る下駄屋専門の高橋喜
 太郎の店があった。また、茶谷正義氏は戦後に大
 工請負、材木店を小規模ながら経営している。木
 挽も大勢いたが詳細は不明である。

おわりに

この集落は他の集落より集散が激しく定着性に
 乏しい。過疎化減少の特に進んでいる実態を考慮
 に入れても、どの時代にも漁業不振の影響は大き
 い。経済力の強い者は先を見る眼が高く、ほとん
 どは島を去ってしまった。

経済支配権を握ったのは全部が関西人の大阪、
 近江、四国の商人であった。なかでも持久力を持っ
 ているのは近江商人の呉服商人が多いことである。

最後に、この調査にご協力下さった方々に厚く
 お礼を申し上げます。特に、駒井重蔵さんにはお
 世話になりました。

ご協力下さった方々、そして参考資料文献等詳
 細については、この調査が終了する報告、その2
 で記述したいと思います。